秘蔵

説経七部集巻之五　信善ノ手記

秘注俳諧七部集巻之五

猿ミのゝ手記

鳶の羽も刷ぬはつしくれ　去来

○空ハ落墨ノ如くの氣色ニ鳶ノ羽ヲカイツロウ自ラ初ノ字ヲ得タリ但モノ字ノ手尓葉ニテ人情ヲ余情ニシタリ其ハ風情ノ寂シキヲ可味

ひと吹風の木の葉静る　翁

○去添附ニテ一吹来テ其跡ノ風情之前句ノ用ヲ案ス鳶ノ梢ニサル風情ニル力知シ但風ヲ木ノ葉ニ對ニテ自己ヲ伏ス自然ノ場ナリ發句ト對ニテ一首ノ歌ノ如リ可心得

股引の朝から濡る川越て　凡兆

早稲田大学文学部図書
45-10480

○前二句ヨカラニシテ人情ヲ附タリ秋カラ満ルト言ヒ寒キ
節ノ身ヲイトウサニアリ但前後句景気也ナラハヤニ人情
カヨミ発句人情ナラハヤ三景色カヨシ此一句ハ去難キ用
有旅行ノサニナリ

たぬきを懼す篠張の弓　史邦

○去藪キ田者トニテ主殺ナトノ隠在山深ニアツテ狸ノ
害有ト聞ニヨリ其防キニ行体ナラヒカ

まいら戸に蔦這かゝる宵の月　翁

○狸ノ語ヨリ大破ノ別荘庵ノ山寺ト可見ト
言ニ宵ノ月トハ白ト可言

人にもくれず名物の梨　来

○トツナレテ画殿カ詞ニ果物ヲ相子ニ植替ルヲ可思

かきなぐる墨絵おかしく秋暮て　邦

○高ツキニ栗ナトシテ有目栗トシテ画出ノサニヲ附タリ但
人ニモ見ハスト言ニ秋ツレテハヒヽキナリ

はきごころよきめりやすの足袋　兆

○其人ノ足袋ヲ寄テ二句カラニニ美景ハ栗ノ白ニ附タル心
ナリ但ヲカシクトハ面白キト言フニテ心ヨキ語ニヒヽキタリ

何事も無言のうちハ静也　来

○前句ヲ体トシテ甚閑ヲ体ケ止観行法ノ内ノ体
ヲ言リ但寺ヲ戒ヲ廻リテ手段妙ナリ

里見えそめて午の貝ふく　翁

○前句ヲ比叡横川ナトヲ下山スル体トシテ早除世ノ物音
耳ニサワキル頃ナリ

ほつれたる去年のねござのしたゝるく　兆

○郭公ソノ声ト言ニ山路ヲ来ル作者トシテ雨ノ後ニ聞こタル筆トシテ空晴テタル趣キヲミセタルヘルクトハウルサギ心乙

芙蓉のはなのはら〳〵とちる　邦

○ミタヽルクト言ヨリ捨タル作トシテ古池ナトノ風情ヲ附タリ芙蓉トハ蓮ノ事之

吸ものは先出来されしすいせんし　翁

○蓮ヲモテナシニ出シタル吸物也

三里あまりのみちかゝへける　来

○僧遠部テ道遠ノ形チヲ出ト言字ヨリ見出シテ出

カヽヘケルトハ言リ

この春も盧同か男居なりにて　邦

○是ハ人ニテ盧同カ男ハ下男之ニ而カラニ也盧同ハ唐朝ノ人ニテ茶道ノ元祖也

さし木つきたる月の朧夜　兆

○是ハ下男ノサシタル木トミテ居ナリト言ニツキタルトハヒヽキ也朧夜トハ盧同ノアヽライナカラサシ木ノツキタルヲ未心得ナカルト言心ニテ朧夜トハ言リ

苔なから花に並ぶる手水鉢　翁

○サシ木ツキタルト言ニ貴人ノ心有ハ庭ニ並フルト言手水鉢ノ是ハ庭ノ合紋乙朧夜ト言ニフリタル體ヲ苔ナカラトハシタリ

雪ハ寒き奥の北風　邦

○進退ヲ論ジタル船人トナリテ百里ノリト心抛テ飯ヲ食
フトシタリ鴻ノ字ニ漂流ノ趣アリ

炊ぎ上て着れたる綿の雪　来

○其ノ言ニ満ヲ持テ言外ニ深海ノ洲鷗ト吟セタリ

国を郷や時鳥なり　翁

○前句ノ寂寞ヲ移ス但漂泊ノ体ヲ言外ニ見セタリ

夜着のまゝおれある力なき　邦

○啼仕成ト言付ニ月日ノ早リ立行ヲ歎リ言トシテ
長病ヲ留ツ山作ヲ言リ

陣をうるさめ車引也　兆

○西国ノ人ノ旅ニ死トナリテ人ノ情ニテイサリ車ニテ故郷ニ
帰リタル体ヲ言リ

盲人を相殺頼より濡しもん　翁

○職キ車ヨリ高貴ノ車ニ換骨シタル変化ニテ其ハ行家ヲ
憐レナリ思車トナシテ物語ナトノ面影風雅ノ諸音
妙ナリ

今や別の刀さし出れ　来

○盲人ナトカクシイ居タル女ノ錠ハ未ダ来タル体ハナシ盲シ
ヤル趣ニ但前句ハ遠の姿附句ハ出ル姿ニ換骨シ然ル
二句カラミテ名人ノ手段ナリ

せはしげに櫛の歯をそろへちらし　兆

○嵯峨之義仲或ハ義貞ノ面影トシテ其敵カサシ出ス
女ノ面影ナリ

おもひきつたる死ぐるひ見よ　邦

○
上五文字ハ士ノサニヲ打射サセタリ是ヲ四句人倚ス
人情打ツキタレ共一二ニ味ニ叱ヱ尤モ四句ヲ二句ニ
思ヒ合セ其一ノ通ヒ合セ博セサレハ迷フヿ可有

青天に有明月の朝ぼらけ　来

○
青天ノ語驚ニ前句ヲツナキ其ノサキヨキ七ノ上句ヲ除テ
討死ニ出ル時分ナル但ニ四句ノ曲節ヲ折和ゲタリ手段
ナリ

湖水の秋の比良のはつ霜　翁

○
是又前句ヲツキ離ス優美ノ句ニテ是ヲ上ノセツノ白キ
ヲホトキタル也

柴の戸や蕎麦ぬすまれて歌をよむ　邦

○
前句ニ秋旅ノ語有ヨリ柴ノ戸ヤトモ一句ニテカクヲ
思ヒ前句ノ二重ノ文飛ナルヲ見トタル證據也

布子着ならふ風の夕暮　兆

○
其人ニシテ詠ナシ

押合て寝てハ又立つかりまくら　翁

○
前句ヲ新奈ノ出女ナトヽ言コヽニ旅情ニテ旅人ノ
サセヲ除タリ

たゝらの雲のまた赤き空　来

○
頭巣ノ前句ヲたゝらの鍾鑄見物トナシテ其場ヲ除タル
モヤウヲ除タリ

一構鞦つくる窓のはな　兆

○
鐘鑄ノ場ハ不離ニテ枝村ニ中アタリトヘ為テ鞦造
ルトハ言リ

枇杷の古葉に木の芽もえたつ　邦

○枇杷ノ古葉ノ句ニ又ハ枝村ノサニナカラ花ニ對シテ落
云ノ謂ハ句ナリ

○

市中ハものゝにほひや夏の月　凡兆

○自然ノ一句ニシテ其悲ミ高ク正門ノ血脈流レノ吟ナリ

あつしあつしと門々の声　翁

○前句ノ餘情ノ的便ヲ移ヘ物ツミトミ云ニ源ト有ル作アリ
之ヲツミトモ有シヨ翁曰ニトシテハ詞残テ[illegible]ニ非ズ
門々ノ声ト直シ玉ヒケリノト言放シテ勝ト可言可味

二番草取りも果さず穂に出て　去来

○勝ヲ粋カ為テ其ハ巷中用ヲ尽リ但市中ヲ田野ヘ移リ
タリ但門々ニト言ニ出テトハヒヽキ也

灰うちたゝくうるめ一枚　兆

○農家ノ閑シキ節ヲサスへクイ急ノ体。句ハセメタリ

此筋ハ銀も見知らず不自由さよ　翁

○生魚ノ乏ニナキ山国ノ体ヲ言リ

たゞとひやうしに長き脇指　来

○其村人ノサニミテド柏子ドハ不自由ナル里人ノ躰ナリ

草村に蛙こはがる夕まぐれ　兆

○貸物ノ気[illegible]ル小者ノ臆病者ノ風情ヲカシク言リ

蕗の芽とりに行燈ゆりけす　翁

○ 万葉ニテ女ノ恋情ニ擬シメタリ

さ山の背をはむかしの蒼む時　朱

○ 行灯ヲ消スト言ヨリ無常観ヲ起シテ蒼山時ト
ハ其ハ己ガ初ルヲ言フナカラ落ノ首ニヒキタリ

所屋の七尾の外ハ往ク紀　北

○ 前句ヲサムゲ物語トモテ其人之見仏上人ノ面影モアリ

急の骨志ハあるきの老を見ん事　蕪

○ 其ハ上人ノ玉フ其浦ノ隠スル老人ヲ歎玉フ意ナリ

狩人入し小はた門の鐙　朱

○ 奥首ノ門当ト為テ源氏蓬生ノ巻ニ門当ノ志ハあるト
言ルニ繋タリ其巻ニ鐙ヲ忘テ源氏ノ君ヲ待セ玉フアリ

立ち寄る扉見を聞く女子を　北

○ サレハコソ源氏ハ君ヲミニイラセントト女子共ノ立カヽリタル也

湯殿ハ昨しの夢ぞ悲しき　蕪

○ カリノ契ヲ結ヒタルヲ寂ニ為玉ヘル変化ナリ

茴香の実を吹き落す夕嵐　来

○ 前句ノ寂ヲ受テ聊タル跡之湯殿ニ夕嵐ハ句ナリ

僧衣もくちあくつる　几

○ 前句ノ凄然ヲ移ス夕嵐ト言情ニ論ルト言ヲ結ヒタリ

雅公の旅と世を経る秋の月　蕪

○ 他ニ他ヲ述附テ僧ト雅公ト対附トス但夕嵐ニ月ノ
試ハ世間ノ月ナレハ論ナシ

年に一斗の地子はかるなり　來

○相公ノ農民ニモ公役ハ遁レサル世ノ忌穢ヲ言リ地子ハ年貢ノ事なり

五六本生木つけたる潴　兆

○イサヽカノ地モ年貢ヲハカルトハ云ヘ体ヲ潴ノ地ニアラハセリ

足袋ふみよごす黒ぼこの道　翁

○其ノ場ニテ潴ニヨゴスノヒヽキナリ

追たてゝ早き御馬の刀持　來

○踏ヨゴスニ急リ体有トシテ刀持ノ足袋トナシタリ

丁稚が荷ふ水こぼしたり　兆

○附ヨリ句ヲ唱ヘ付ル句深ク味ハ子ハ世ニ言会ル附ト言ニ

蔵ん

戸障子もむしろがこひの賣屋敷　翁

○前句ノ水ヲ絶キ水ヤトシテ水ニ富タルハ長者ノ一ツナリトシテ附タリ

てんじやうまもりいつか色づく　來

○其場ノ藤ノ中ニ秋ノ色ニ色ヅキタル哀ヲ言リ二句一意トシテ賣屋敷ニイツカト言歎息ヲヒヽカセタリ

こそこそと草鞋をつくる月夜ざし　兆

○二句一意ナレハ家ニモ他當ノ秋又ノ末ニナ付タルヲ附タリ
但イツカト言ニコソコソトハヒヽキ也

蚤をふるひに起し初秋　翁

○浪俤ニシテ此蚤ヲ振ヒニ起シ人ヲ草鞋ヲ進ル人ヲ月

夜サレニ三ツメル態ナリ

其侭よころび落たる升おとし　来

○与奪の附之事ハ明や

ゆかミて蓋の合ぬ半櫃　兆

○升落シノ用を言ヒトテ半櫃ノ蓋ノ句ヲ附タリ是ラハ
器物ノ句ニシテ居所ヲ不論

草菴ニ暫く居てハ打破り　翁

○前句ノ無作ヨリ翁ノ身ノ上ヲ思ヒヤリテノ句ヲ為玉ヘリ
蓋ノ合ヌノ語ヨリ打破ハヒヽキ也

いのち嬉しき撰集のさた　来

○打破りノ菴トミテ附タリ

さまざまに品かはりたる恋をして　兆

○撰集ニハ恋ノ部ニ分テ別ノ恋不逢恋別恋待恋
待恋後朝ナドサマ〳〵アレハ其ヒヽキヲ附タリ

浮世の果は皆小町なり　翁

○与奪ノ二句一意也小町ノ一世ハ世ニ知ル所ナリ

何故ぞ粥すするにも涙ぐみ　来

○前句ヲナレノ果ノ人ニ小町カ嘆ヲ言トミテ食ベ物フルニイノ
体ナリ

御留主となれバ広き板敷　兆

○左近ノ詠ノ読ヲ附テ其附ノ成ル人ノ浅クニ久ルナリ

掌ニ虱這はする花の蔭　翁

○ 此當座ノ論ヨリ物得テ又主ヲ花ノ落ニ風流ハスルト 右
愈ノ物ヲ云合セタリ

霞うこかぬ昼のねむたさ　来

○ 花ノ主ヲ楽ナカラ風流スルニ動ヌノ語ハヒヽキナリ

○

灰汁桶の雫やみけりきりぎりす　凡兆

○ 此発句の体灰汁桶ノ場ハ夜ニ雫止ケリト言ニ甚寂
寞体言語ニ述カタシ是ヲ芭門ノ寂ト可謂

油かすりて宵寝する秋　翁

○ 前句ノ情ヲ執明ノ始ニ句ハセテ一雫ヤミケリト言ニ

宵寝ハ句之油カスリテトハ翁ノ古ニ伊賀伊勢ノ詞之

新畳敷ならしたる月かけに　野水

○ 前句ヲ秋宵ト為テ稲仕舞ノ句之

ならへてうれし十のさかつき　去来

○ 前句ノ座敷ヨリ集ニテ一家ト為シ祝宴振舞ノ席ニ
シタリ

千代経へき物を様々子日して　翁

○ 杯ノ数ヨリ子日松ノ思案ヤ苗テ年賀ヲ子日ニスル
ト言心ニテ千代ヘキ物ヲサせてしくトハイエリ

鶯の音にたひら雪降る　兆

○ 時節トモ言ヘシ鶯ハ春ノ上ニ對シ雪ハ子ノ日ノ松ノ粉花
下言經鶯ノ音ニイカニシテタヒラ雪フルト言句也

乗出して肱に余る春の駒　来

。タヒラ事ノケシキニ附カヘリタル体有テ北風ニ想馬嘶ト言ハ駒ノ頭向ハ出タリ 但春ノ駒ノミヤヒトテ馬ノサカル節之

摩耶が高根に雲のかゝれる　水

。二句カラニ也前句ヲ先陣ノ抜魁ナドヽシテ其處明ノケシキ之

夕めしにかますご喰へて風かをる　兆

。魳ノ体ニ好タルヲ夕食ト移シテモヤノ高顔風ヲ附タリ 但モヤノ煙ノ漢巴シモヤウ之

蛭の口所をかきて気味よき　蕉

。農家ノサマ見ヨリ此附見タリ 但風薫ニ力エミト八句ナリ

ものおもひけふは忘て休む日に　水

迎せはしき殿よりのふみ　来

。前業ニテ又此句ハ合テ二句一業トス 但前句ノ物思ヒヲ前妻ヨリ始ヲ受タル妾トシテ宿ニ下リ居タル体ニシテ當句ハ附タリ

金鍔と人によばるゝ身のやすさ　蕉

。女ノ主ヲ男ニ移シ主ノ寵愛ニホコリタル表見ト附タリ 金鍔ハ其人ノ仇名ニテ上ミヌ驕奢ト言ニ等シ

あつ風呂ずきの宵々の月　兆

。金鍔ノ詞ヲ移シテ佃屋親父ノ熱風呂好ニ為タリ

町内の秋も更行明屋敷　来

。近所ノ居風呂ヲ費ヒ歩リガ上ニ甚麻長湯好ト人ニ倦レヲ状ト言字ニヒヽカセ更行ト言ニ受リトハヒヽキナリ

ゆふまくれ見るも寂しき遠こゝろ之　水

○二句一章ノ逸句之

花さそふ身は西念か寂しさて　翁

○無常ナル者ハ其満ルヲカクトハ操リ行浮世ノ中ヲ観想ノ句之

木曽の旅芝まて来ても苦行　兆

○二句一章之ス夕キハ荒杖也

帰り申山藤伝へ四十雀　水

○其ノ業ニ小鳥ノ鳴ニ更ニ業リト言ニ四十雀トハ初花ノヒヽキモ有テヨカシ但来曾ニ山路トシテシメシク二句一章也

暮まて旅のむ〇をしける　珠

○前句暮色ノ体ヨリ霞モ解タクトシテ事稀コソノクリヲ附タリ但二句一章之

名もかれのあれて鳴る枯尾花　兆

○紫サスハ体ニシテ其周ヲ附タリ

旅の袖さて見かし　翁

○前句ノ様々ナル趣ヲ旅寝ノ中ニ移シ旅寝ノ二字ニ行灯ノ二字ヲ更ニ枚ヘモアツカルヘシ

すゝしきめの夢見も?さくて　珠

○有明シトハ書ヨリ旅中シテ清カ内?ノ西気ヲ附タリ

御朝まひ神猿の鳴　水

○二句一章ノ附之猿トヒヽキテ思ヒ料トハ此器ナカラ旅猿ノ名ノ思ヒ料ヨリ

夕月夜昼の並根のは廣る　翁

○ 前句ヲ実恩卅ニ為テモ鴈ヲ継タリ前ニモ尾巻ノ評ノ
思草トヨメレハ萱根ハ其ヒヽキナリ

人もこらねしあつさうれ水　北

○ 二句カラニ也此句彼従遥々也アカツクワノ水トハアカヲ子ウニ
テ閼伽備ノ水ト云ヘキヲ書誤リタルト三エトナリ

嘆つきよ白髪いよゝそて捨らん　角

○ 前句ニ古る事磨ノ姓ス師ヨトシテ嘆ツキト言平語ノ
ツ詞ニ誹諧解ヲ言リ

みも木すの旅をとふらん　来

○ 自絵ス人ノ業ヲ継タリ

恨すり男の雲の中そて渡つき　兆

○ 物語抱山ノ発句ノ熊トシテノ甚京南ヲ宿ル場ヲ言リ

かつ蔵の中しろハよさき神やせ　翁

○ 甚鴈ノ事句ヲ継ケテ句ヲ離レタリ

もの音の底をさくるか家精　来

○ かつ蔵ノ孔人ノ難紙隔ノ住タル締ナレシテ声高ク継タリ

雨の寒りの日まち風迷　水

○ 雨雲リニ見ルホテイトシテ鳴雨ヲ無常風迷ニ見ルトヘタリ

旦暁る表境まよの花のゝるさまよ　翁

○ 古紙ノ斜ヨリ雨雲リ遍山ニ経テ生死ニ轉シ玉エリ
裏書ヨリ此章情モ句表ナルヲ今ハ世ニ同事ヲ字ヲ表ハズ

イ無
あゆうしをあよ背闇のきよくらん　兆

○ 宗鑑ノ場やて見晩ノ辞ニナヨリ〆氷ハ移ナリ

塙

糸桜腹一はいに咲にけり　来

○前ノ卯ニ糸桜ノ発句有テ花ノ中ニ桜ヨミタル事ハ翁曰
並ニ乗シ翁曰桜ニ擬ル事ハ発句ノ句ニテハナラスト宣ヘリ
然ルヲ此句ハ格幕一条ハ古来ノ桜ニテ翁ノ枝
今色支ヲ枝一ハイトト言リ

春ハ三月曙のおもしろト　水

○凡桃田カヽル此ノ詠リニ桜ヲ除テハ世ノ人ノ二トイモ已レト
イヱハ野水カ此暮ヲ句為テ花ノ心ヲ二句ノ間ニ匂ハセタリ
是隠見ノ法ト可言但春色言ヒ方ナシ

○

餞乙刕東武行

梅若菜鞠子の宿のとろゝ汁　翁

笠あたらしき春の曙　乙刕

○於此ニテ前句ノ宿ニ至ルヲ翁ノ餞別ヲ謝スル心ニテ只
イサキヨク門出仕ルト言心テ心ヨキ句トナシタリ

雲雀鳴小田に土持比なれや　珍碩

○前句ノ心ヨキ体ヲ長閑ナル体ニ雲雀ヲアシラヒテ農家ノ
体ニ転シタリ

しとぎ祝ふて下されにけり　素男

○小田土於祝ニヤト受テ附タリ但シトキハ粢ノ字ニテ白米ヲ洗テ臼ニテハタキ粉トナシ生タシコニシテ初午ニ備フ

行燈りもしらて暮の月　利

○粢ヲ分テ与ヘラレタルヲ喰ス前ニヒカヘ至タル体ナリ

二階の客ハたゝれたる秋　翁

○前句ノ閑寂姿ヲ商人客ナトノ客ノ立行シ跡ノヒツソリトシタル体ニ移ス

放やる鶉の跡ハ見へもせす　男

○大ニ静シテ甚ヒツソリトシタル体ヲ生動シ而テ客ノ立行タル跡ヲ放テヤリタル鶉トナシテ其味ヲ移ス

稲の葉伸の力なき風　硯

○鶉ヲ放ツ場ナカラ飼置タル物ヲ放ツハ及附ヨモノナレハ力ナキトハ言リ

発心のはしめに越る鈴鹿山　翁

○カナキト言ヨリ轉シテ西行ノ面影ヲ言リ

内蔵頭かと呼声ハ誰　孤

○親族友ナトノ跡追来テ呼止シヨ内蔵頭カト呼タルハ誰ソニヤト振向タル体ナリ

卯の刻の箕手に並ふ小西方　硯

○前句ノ語勢ヲ人息ノ分ラヌト言テ陣ヨシキタル体也

すゝまる雲のしつまりかへり　男

○ミツメタル附之他喧ノ気色ナリ

禁の札花の札に續けて　孤

○前句ヲ禅林ナトヽニテ其境内ノ標榜ヲ附タリ

萑行よる鴫の一声り　智月

前句ヨリ逢タル様子ナルヲ寐ニ臥ヲ振リテ寝ニ成ナシテ
鴫ノ一声トハ言リ

懐に手紙あたゝむる秋の月　凡兆

是モ又此恩ニシテ恋情ノ一節也前句ヲ喧噪ノ中ヘ其
所ノ出テ結メタル一声トシテ懐ニ手ヲアタヽムルトハ大
方ノ袖ノドヒテラナリ

汐さらぬ芦の葉つゝ　珍加

浦人ノ日和ヲミル姿トシテ其ノ場ヲ附タリ

鎗の柄に立すがりたる花の暮　去来

宣ラストモ言体ニ老タル体有ハ欲ヲ進来テ兄失フタル一騎孤
ノ哉行武者トミセタリ着ハ月トモ秋アレト月ハ無用ノ月也

灰まきちらすからし菜の跡　兆

○門外ニ扣タル供人トシテ轉タリ

春の日に仕舞てかへる経机　正秀

○跡ト言ヨリ仕舞テ帰ルトハヒヽキニテ野菜ノ辰果タル寸部
中ノ用ノ句ナリ

店屋ものくふ供の手がはり　来

○二句一体也カラミノコナリ

汗ぬぐふ端の市の調の糸　半残

○下部ノ手用ニ備テ市ノ吟味ヨリ言分フ体之

わかれを惜しき雛の下　土芳

○手拭ハ庇ノ影トナシ其場ハ鶴ノ下ト定メセ話分ト言ニ
忘レ物ノ手拭トハシタリ

大鍋にひくりかへす思ひして　珎

○鶺ノトト言掛ノ帝織仲トシテ大纏扮ノ思ヒタル体ニ言リ

沙き濡衣のとり所なき　芳

○大タレト言給ヲ叶ハヌ恋ニツノリタル女トシテ二句一ツニ

小刀の蛤丹なる細工箱　残

○前句ヲ恋席シキツノリタル者トシテ草細工スル者ノ様子ヲ言リ但蛤丹トハ草色ヲソル小刀ヲ言

桐りをきぬ大年の夜　園風

○素人ノ理窟ト為テ年桐ヲツリタル体ニシタリ

変もとハ思ふ彼も須磨の浦　猿雛

○桐ニやトモストハ離散姿アレハ夜ニ在辺ノ人ト轉シテ幽ニミヲ言リ

鍋もち合せ萬なる店衣　残

○其人ニシテ住割タレハ跡ヌカシタモナシ織タル姿ヲ言リ

此暮も露をくるる　破扇　風

○二君ニ仕ヘサル浪人トミナシ其用ヲ除タリ　此暮モトト言ハ句之

譬陰なれて替りの月　雛

○前ハ情ノ端ナルヲ浪ニ換置シテ牧ヲ退ナカラ月ミル風情之

嘆妻の体ハちりうき梅桜　芳

○前句月見ナカラ嘆キ居ル仲トシテ嫉妬タル様ヲ言リ

修ヘハそのわをこくらんる顔　風

○前句体ニ情ヲ転シテ嫉妬ノ心ナキ女房ノ体ヲ言リ
コノタトハ篤実ヲイフ也

形なき結をわりへる気性　嵐葉

先師信人ト云テ塗師ノ弟子ニ成タリトシタリ

薦ニ雪ふる　竹の割る音　史邦

其人ノ気較ニシテ下句ハ又ニ餘ト言ニ雪ノ竹ハ枝之

花あちこちの連も定まらん　野水

陽炎ノ下句トナシ風流ノ趣ヲ言リ但白ノ花ナレハ花及ハ
饒利ナルヨリカクハ附タリ

絲の　枝と海の　春風　羽紅

花ノ嗜ヲスル一間ノ風情ヲ言リ但春風ハ袖ト言ハ佐保姫
ノコトニテ添ヘ春風トナシタルハ一段ナリ

秘註誹諧七部集巻之五　猿蓑の部終